

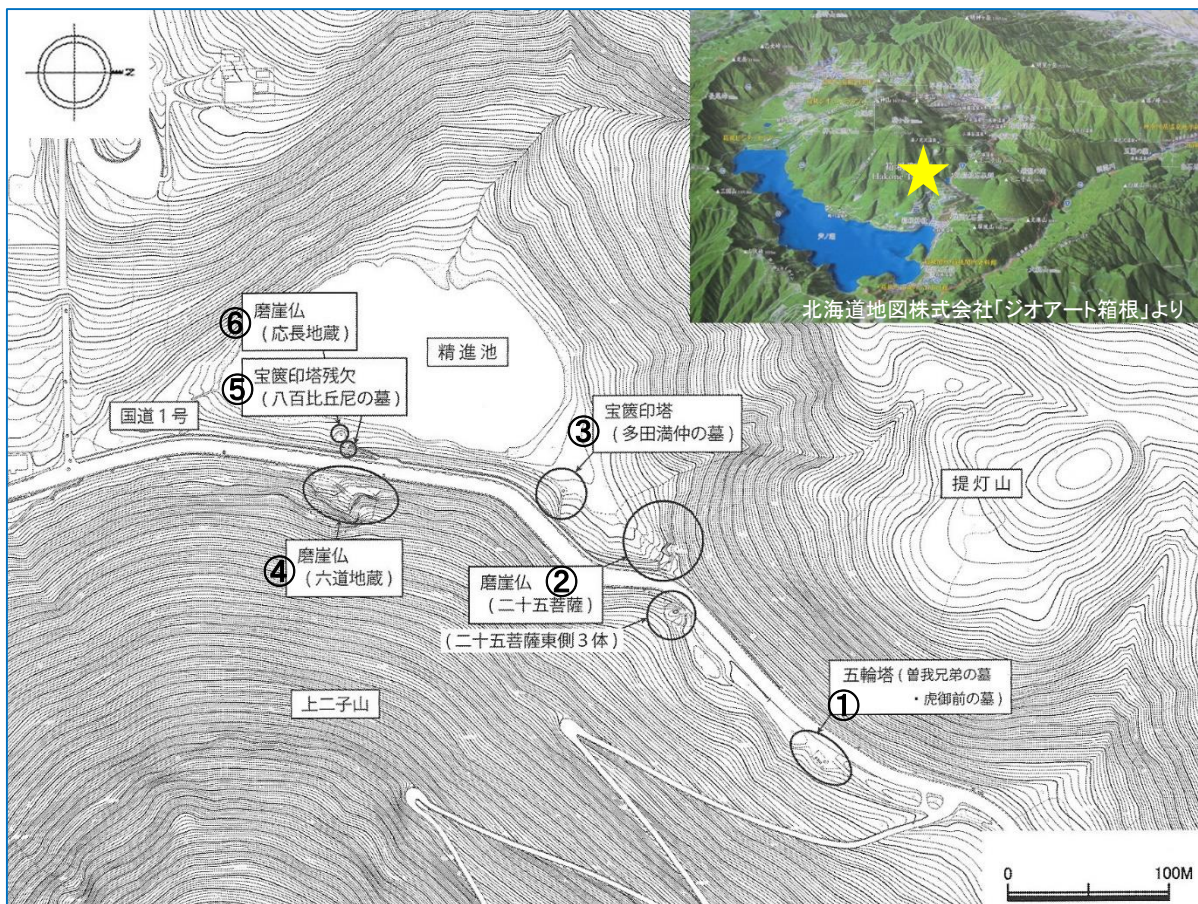
## 元箱根石仏・石塔群

—700年の時を超えて、古道の奇岩に刻まれた地蔵の群れ—

### 解説パンフレット

箱根七湯の一つに数えられる湯治場・芦之湯近くのバス停で降り国道一号線沿いに少し歩くと道端に巨大な3つの五輪塔が忽然と現れます。曾我兄弟と虎御前の墓と俗称されるこの石塔を手始めに、中世には箱根越えの官道であった湯坂道で最も標高の高い位置近くにたたずむ精進ヶ池の畔には、巨岩に刻まれた地蔵菩薩の群れが舞い踊る、驚きの空間が広がります。

かつて「賽の河原」とも呼ばれたこの場所に、一体誰が、何の目的で、これらの磨崖仏や石塔群を作ったのか。石のアーカイブズともいうべき岩石に刻まれた銘文や文献資料からは何が読み取れるのか、また、石造美術、地蔵信仰などの観点から造立の経緯を探ります。



■参考写真 01:元箱根石仏・石塔群の位置図(■資料 02:『元箱根石仏・石塔群保存整備事業報告書』箱根町教育委員会、1999 年より)

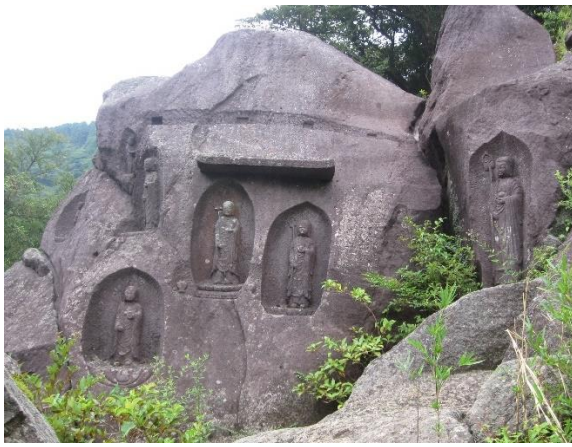
### 1.1 磨崖仏 —岸壁の地蔵群—

「磨崖仏」とは自然の岸壁に浮彫・線刻などで仏像を表わしたもので、その源流はインド(エローラ)や中国(龍門、敦煌)の石窟寺院にあるとされます。日本では、自然の岩石に対する民間信仰や山岳仏教(密教)と結びついて彫られたとされ、奈良時代から始まり平安後期—鎌倉時代に盛行し、その後は小規模になっていきます。

#### 1.1.1 磨崖仏(俗称 二十五菩薩) 参考写真 01 位置図②に所在【参考写真 02, 03, 04】

国道1号線を挟んだ二か所に露出した安山岩の巨塊に、地蔵菩薩像21体、阿弥陀如来像1体、供養菩薩像1体の立像(像高16~97cm)が彫りめぐらされています。国重要文化財。

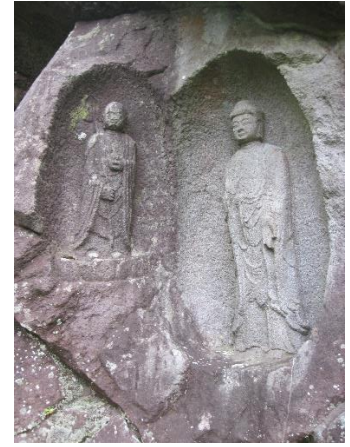




■参考写真 02: 磨崖仏俗称二十五菩薩西側 東面



■参考写真 03: 地蔵菩薩と供養菩薩(左上)



■参考写真 04: 二十五菩薩中、唯一の阿弥陀像(右)

### 1.1.2 磨崖仏(俗称 六道地蔵) 参考写真 01 位置図④に所在【参考写真 05】

上二子山の崖面(安山岩)に彫り出された像高 315cm の神奈川県下では最大の中世磨崖仏。国重要文化財。平成の保存整備に際して室町時代当時の覆屋が復元されました。【参考写真 06】



■参考写真 05: 覆屋が復元される以前の六道地蔵(■資料 03: 神奈川県広報課撮影コレクション 4199204992 より)



■参考写真 06: 平成の保存整備で復元された覆屋



■参考写真 07: 俗称応長地蔵または火焚き地蔵

### 1.1.3 磨崖仏(俗称 応長地蔵、または 火焚き地蔵) 参考写真 01 位置図⑥に所在【参考写真 07】

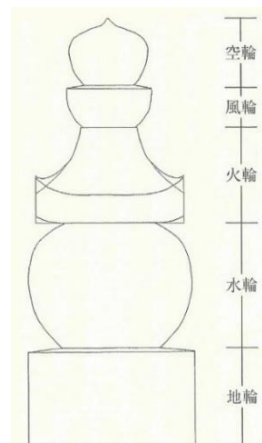
應長元年(1311)の銘文のあるこの地蔵像の前で送り火を焚き、精進池畔で花や線香をあげ、霊を山へ送る習慣があったとされ「火焚き地蔵」とも呼ばれています。縦 190×横 150cm

## 1.2 石塔(宝篋印塔、五輪塔) —人々の平安への祈り—

石を素材として造立された石塔には、仏教本来のストウパの流れを受けた層塔・多宝塔・宝篋印塔、当初から墓の標識として建てられた無縫塔・卵塔、日本の密教の教えの中で形成されたとされる五輪塔・板碑などがあります。

### 1.2.1 五輪塔(俗称 曾我兄弟の墓、虎御前の墓) 位置図①に所在【参考写真 09】

「五輪塔」とは塔婆(石塔)の一種。方形の台石(地輪)、球形の塔身(水輪)、梯形の屋根(火輪)、半球形露盤(風輪)を積み、宝珠(空輪)を上げる。これらが密教における地・水・火・風・空の五大を表わすとする思想から生まれたもので、実際の造形としては日本ではじめて作りだされ、平安中期頃から供養塔、墓塔として用いられました。石造が多く、中世に作られた石塔の



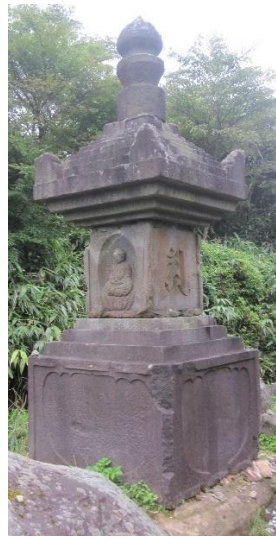
■参考写真 08: 五輪塔の構造 (山川均『歴史のなかの石造物』吉川弘文館、2015年、口県立図



中でもっとも一般的で数が多いとされます。【参考文献 02、03】

大日如来と阿弥陀如来が同体との考えが普及し浄土教信者による造塔が進みます。

元箱根の五輪塔は安山岩製で、高さは 240～260cm、関東最古の銘文をもちます。国重要文化財。実際は曾我兄弟や虎御前の墓ではありませんが、俗称の謂われに関しては後述します。



■参考写真 09: 五輪塔\_ 俗称 曾我兄弟の墓・虎御前の墓 ■参考写真 10: 宝篋印塔 ■参考写真 11: 宝篋印塔残欠  
(俗称 多田満仲の墓) (俗称 八百比丘尼の墓)

#### 1.2.2.1 宝篋印塔(俗称 多田満仲の墓) 参考写真 01 位置図③に所在【参考写真 10】

「宝篋印塔」とは塔婆(仏塔を意味するストウパの略)の一形式。元来は宝篋印陀羅尼を納める塔の意で供養塔や墓塔に用いられました。そのルーツは、インドのアショカ王の故事にならって呉越国王が造った金属製の小塔とされていましたが、近年の研究では中国で作られた石塔が伝来し発展したものとされます。【参考文献 36、59】

元箱根の宝篋印塔は安山岩製、神奈川県下で最古の紀年銘を持ち関東形式なるスタイルを確立。その後関東各地で造立されるとともに様式の変化が進みます。(俗称については後述)

#### 1.2.2.2 宝篋印塔残欠(俗称 八百比丘尼の墓) 参考写真 01 位置図⑤に所在【参考写真 11】

造立年紀が観應元年(1350)と南北朝時代であり、他の石仏・石塔群とは半世紀近くの隔りがあります。反花座(かえりばなざ)と観應元年の紀年銘のある受台より上の部分は造立当時の部材が失われており、江戸時代に作られた部材が寄せ集められたものとされています。(俗称については後述)

## 2. 歴史を照らす文字記録 1

### 「金石文(造像銘記)」ー石に刻まれた古人の想いー

元箱根の磨崖仏や石塔の一部には「造像銘記(銘文)」が刻まれています。その銘文が700年の風雪に耐えて後代の人々に造立の年代や関係した人々、経緯等を伝えているのです。

金属や石に文字が記された史料は「金石文」と呼ばれます。これらを対象とした金石学は江戸時代後半に盛んとなり、さまざまな金石文を集成した資料集(松平定信の編纂した『集古十種』など)もつくられました。

木彫の仏像でも造立の由来などが光背や台座の裏面に彫り込まれたり、像の胎内に納められることがあります。石造物に刻まれた銘文は石を媒体とした貴重なアーカイブズに他ならず、そこからは不完全ながらも以下のような情報を得ることができます。

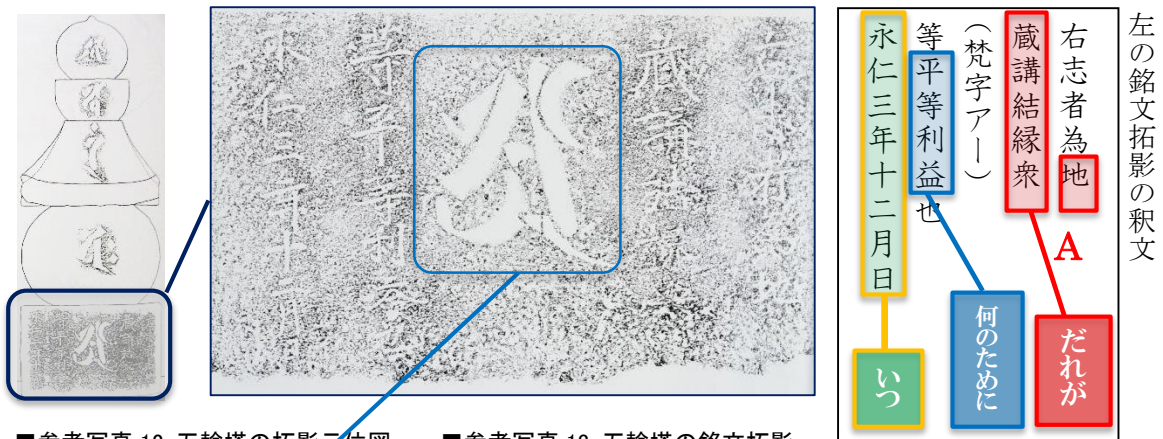
	造立時期	願主（発案・出資）	経緯（目的）
・五輪塔（「俗称 虎御前の墓」）	永仁三年(1295)	地藏講結縁衆	平等利益
・磨崖仏（二十五菩薩）	【仏 02】永仁元年(1293)	一結縁衆	聖霊法界衆生平等利益
	【仏 18】永仁三年(1295)	比[丘]尼	為父母[并]自身
・宝篋印塔（多田満仲の墓）	【西】永仁四年(1296)	祐禪、四郎尉	興隆仏法、鎮護国家
	【北】正安二年(1300)	平氏女、良観、心阿	四恩法界成仏得道
	【南】	平宗胤以下の結縁衆、寂円、大蔵安氏	
・磨崖仏（俗称 六道地藏）	正安二年(1300)		
・磨崖仏（火焚き地藏）	應長元年(1311)	講衆六十人、藤原氏女	過去聖霊成仏得道
・宝篋印塔残欠（八百比丘尼の墓）	観應元年(1350)	結縁衆	

●参考<拓本>

石塔や石仏の一部に刻まれた造像銘記（銘文）は数百年の風雪に耐えて残るものの、一部の文字は判読が困難な場合があります。その推定結果が研究者によって異なると解釈が複数出てきます。なお、石造物調査においては「拓本」を採取して（拓影）文字や図像を判別することが行われます。

2.1 五輪塔（上記 1.2.1 参考写真 01 位置図中①に所在）

三基ある五輪塔の内、「俗称虎御前の墓」の地輪部分の東面に銘文が刻まれています。



■参考写真 12: 五輪塔の拓影示位図

■参考写真 13: 五輪塔の銘文拓影

（■資料 01:『箱根町文化財研究紀要第 25 号 元箱根石仏・石塔群の調査』箱根町教育委員会、1993 年、  
 県立図書館 K06.85 4 25、■公文書館所蔵図書 K06-8.51-0001 より）

●参考<種子(種字)>

密教において一つの文字で仏を表現する梵字（サンスクリット文字）を「種子（種字）」と呼びます。種字は、宝篋印塔の塔身部分の四方、五輪塔では地・水・火・空・風輪の東西南北 4 面、さらには磨崖仏（二十五菩薩、応長菩薩）が彫刻された岩石などに彫刻されています。



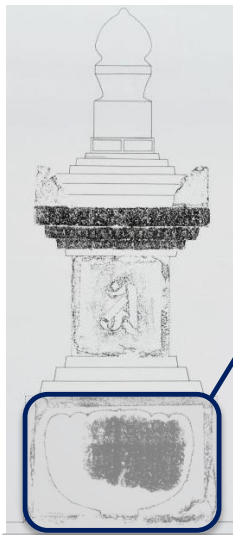
■参考写真 14: 墓石に見られる梵字  
 (新谷尚紀・関沢まゆみ編『民俗小事典 死と葬送』吉川弘文館、2005 年、  
 県立図書館 385.6 62 より)

五輪塔に刻まれる種字は「四方五大」と呼ばれ、一種の大日真言（密教において、もろもろの仏・菩薩あるいは諸天に呼びかけて祈請し、あるいは儀式に効力を賦与するために唱える呪文。サンスクリットではマントラ）です。五大すなわち、ア(地)、バ(水)、ラ(火)、ハ(風)、キャ(空)を本体(発心門=東)とし、修行門=南、菩提門=西、涅槃門=北の四方に当てるもので【『梵字入門』綜芸社編集部】、





### 2.2.3 北面の銘文



正安二年八月廿一日

心阿 E

供養導師良觀上人 D

為四恩法界成佛得道也  
 供養檀那「浄」意「并」平氏女  
 「右結縁衆」回「向」分「御」寶「前

■宝篋印塔 俗称 多田満仲の墓 (北面)

■資料 01 より転載

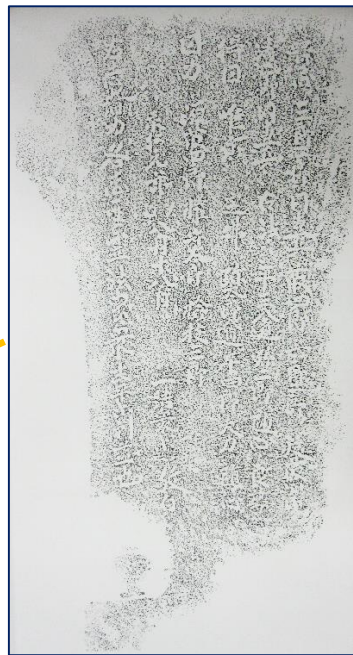
■参考写真 18: 宝篋印塔北面の拓影示位図 (■資料 01 より)

### 2.3 磨崖仏(俗称二十五菩薩) 上記 1.1.1 参考写真 01 位置図中②に所在

#### 2.3.1 仏2右側の銘文



■参考写真 19: 二十五菩薩 仏2 右側の銘文の位置



■参考写真 20: 二十五菩薩の仏2 右側の銘文の拓影 (■資料 01 より)

實心 三郎二郎同妻女 藤四郎 六郎二郎 後藤四郎  
 清二郎同妻女 古法 平三入道 弥二郎 随心 良尊  
 得「円」唯「願」定佛 弥太郎入道 平四郎 大力 随心  
 「円」力 源藤四郎 權守太郎 檢校三郎  
 永仁元年辰巳八月十八日 一結衆等 敬白  
 右志者為各「悉」聖靈法界衆生平等利益也

■資料 01 より転載

※俗称六道地藏、俗称応長地藏、俗称八百比丘尼の墓の銘文は資料 01 に掲載されています。  
 『神奈川県史 資料編(2) 古代・中世(2)』にも一部別解釈の釈文が掲載されています。

### 2.4 造像銘記(銘文)からわかること

●だれが<完成落慶供養を行った僧侶>「供養導師良觀上人」【上記銘文中D】

宝篋印塔の銘文にある正安 2 年(1300)8 月 21 日に举行された供養とは「六道地藏」の完成落慶供養と考えられています。

その供養導師である「良觀上人」とは鎌倉・極楽寺律宗の僧・良觀房忍性(にんしょう 建保 5 年

1217年～嘉元元年1303年)であるとの説が有力です。

忍性は、律宗の大本山である奈良・西大寺を中興した僧・叡尊の弟子であり、その後関東に赴き、鎌倉幕府(北条氏)の信任も得て教勢を拡大します。横浜市金沢の称名寺が真言律宗寺院として開山するのに関与しました。非人や病人、孤児等の社会的弱者の救済に尽力したことで有名です。

律宗教団は各地で公共事業を勧進することで教勢を拡大するとともに、渡来系工人を用いた石造造立に熱心に取り組んだことから、当時84歳の高齢ではありましたが忍性は元箱根石仏・石塔群の造立にも少なからず関与したのではないかと考えられています。

→■参考写真20:「極楽寺忍性五輪塔」:嘉元元年1303年に87歳の高齢で死去した忍性の遺骨は、極楽寺・竹林寺・額安寺の3か所に分けられました。極楽寺には蔵骨器が納入された五輪塔が今も残っています。国重要文化財。(写真はwikipedia“鎌倉文化”より転載)

→■忍性がしたための書状は、鎌倉での拠点であった極楽寺の所蔵資料などで見ることができます。県史写真製本 極楽寺所蔵資料1『神奈川県史 資料集(2) 古代・中世(2) 1355』公文書館資料ID:2200401799)、県史写真製本 極楽寺所蔵資料7(『神奈川県史 資料集(2) 古代・中世(2) 1352』)(公文書館資料ID:2200401880)、県史写真製本 極楽寺所蔵資料1(『神奈川県史 資料集(2) 古代・中世(2) 1229』)(公文書館資料ID:2200401884)

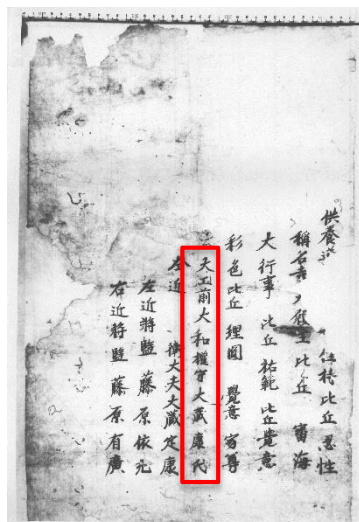
●だれが<彫刻・造立に従事した石工職人>「大蔵安氏」【上記銘文中 C】、「心阿」【上記 E】

「大工大和國所生左衛門大夫 大蔵安氏」は、大和国に生まれた石工(武士と同等の官職を持った)です。「大蔵」の姓をもつ石工は各地の石造物にその名を銘として残しており、1260年大和の額安寺宝篋印塔の石大工「大蔵安清」にはじまる「大蔵派」なる石工の系譜を形成しているとされています。

そのルーツは、東大寺復興のために重源が宋から呼び寄せた中国人石工たちの末裔である、高度な石造技術を継承する職人集団「伊派」と極めて近い集団とされます。

大蔵安氏が製作し、のちに「関東様式」と呼ばれる形態的特徴を持つ宝篋印塔は、その後、関東の各地に造立されていきます。

また、忍性とその開山に関与した真言律宗寺院である称名寺にまつわる金沢文庫文書『堂建立書』に見える「大工前大和權守 大蔵康氏」と「大蔵安氏」が同一人物であり(「康」と「安」は同音の訓)、かれは単なる石工ではなく番匠大工であったとする説もあります【参考文献52】。



■参考写真21:「堂建立書」(■資料04: 県史写真製本 金沢文庫古文書53『神奈川県史 資料集(2) 古代・中世(2) 1356』、■公文書館資料ID:2200405765より転載)

「心阿」は13世紀末に瀬戸内海沿岸部(広島県生口島、三原市)に立つ仏塔の銘に名を残しており、忍性ら律宗教団に関わる「西大寺系の石大工」とであるとされます。

元箱根の宝篋印塔北面の銘文を起稿した心阿が大蔵安氏の息子(大蔵定安)であるとする説もあります【参考文献60】。



●だれが<願主(発願者・出資者)> 「地蔵講結縁衆」【上記銘文中 A】ほか

- ① 「地蔵講結縁衆」とは地蔵菩薩を信仰する人々の集まりです。地蔵菩薩は六道に迷う亡者を極楽浄土に導くと説かれるので、地獄での救済を願って死者供養に講会を催すこともあるようです。グループとしての作善(善行を施すこと)として地蔵像や石塔の造立を発願し出資することもあったようです。

箱根町教育委員会が調査を実施した 1990 年代においても当地では 8 月 23 日に信者(子供)を集めての地蔵盆が行われていました(24日は古くからの地蔵菩薩の結縁日)。

中世の石塔を造立した担い手の多くは「地方の豪族ないし、中級の武士、降っても名主層の人たちと考えられ、社会的には中間階級の富裕層であると推定される【参考文献 19】」とされ、また、元箱根の宝篋印塔をはじめとする巨大な石造物群を造立するには「相当の経済力や、あるいは多大な人間や物資を動かすことのできる権力が必要である」として、銘文に刻まれた人々の背後に大きな権力がパトロンとして介在している可能性も指摘されています【参考文献 16】。

- ② 「武石四郎左衛門尉平宗胤」【上記 H】とは、千葉氏庶流の武石宗胤(1252~1314)のことで、「四郎」は通称(字あざな)で、「左衛門」は官職を表し、「平」は千葉氏がもとは平氏の出自であることを示すとされます【参考文献 60】。
- ③ 「四郎尉」【上記 G】とは「四郎衛門尉」と読むべきで、佐々木信綱の四男なので、通称(字)は「四郎」であり、官職が「左衛門尉さえものじょう」であった京極(佐々木)氏信(きょうごく うじのぶ 承久 2(1220)生)であった可能性が示唆されています。幕府の要職にあった京極氏信はモンゴルからの国書が届いた文永 5 年、軍事的脅威を契機として経典を箱根山中の石塔に納めようとしたが、志半ばにして永仁 3 年(1295)に死去したとされます【参考文献 60】。

●いつ<紀年> 「文永五年戊辰」【上記銘文中 B】

文永 5 年(1268 年)1月にモンゴルのフビライが派遣した高麗の使節団が大宰府へ到着し、蒙古国書等が鎌倉幕府へ送達されます。幕府は讃岐の御家人にモンゴル来襲への防備を命令。折しも 3 月には北条時宗が 18 歳で鎌倉幕府執権に就任。軍事的な防備の一方で幕府は鶴岡八幡宮や箱根神社等の祈願所に奉幣し、外敵調伏、国家安泰(関東静謐)の大祈祷が繰り返し奉修されます。

箱根神社に今も残る文永五年銘を持つ鉄湯釜(国重要文化財)は戦勝祈願の湯立神事の祭祀に用いるために铸造・奉納されたとされます。【参考文献 45】



■参考写真 22:「県指定重要文化財 鉄製湯釜及び浴堂釜(工芸) 元箱根 箱根神社」

(■資料 05:『箱根の文化財第 10 号—指定文化財特集号—』箱根町教育委員会、1975、公文書館所蔵図書 K06-8.51-0004 より)

文永 5 年の夏には忍性の師・叡尊も大阪四天王寺で攘夷を祈願。同年 10 月には日蓮が時宗に対して外寇を警告します。

精進ヶ池畔に石仏・石塔群が造立されるに至った端緒は、モンゴル来襲という国家の危急存亡に際して祈願のための経文奉納・造塔供養にあったのかもしれない。



### ●いつ<造立紀年銘>「永仁元年辰巳」【上記銘文中 I】

正応 6 年〔8 月に「永仁」に改元〕1293 年旧暦 4 月 13 日の明け方（卯時）「相模湾を震源域とする地震（M7.0）が発生。神奈川県鎌倉付近を強震が襲い、寺社に大きな被害が生じている。死者は、数千とも 2 万以上ともいわれる。』『相模トラフ沿いの地震活動の長期評価（第二版）について』平成 26 年 4 月 25 日、地震調査研究推進本部地震調査委員会より】

この鎌倉関東地震については様々な文献史料に記録が残っています（醍醐寺僧の手になる『親玄僧正日記』、公卿・三条実躬の日記『実躬卿記』、『鎌倉年代記』、『鎌倉大日記』ほか）。鎌倉時代に地震、火災、水害等が頻発していたことは『吾妻鏡』の記述からもわかっています。

江戸後期に書かれた箱根温泉の案内書『七湯の枝折』で精進ヶ池畔の石仏・石塔群に触れた個所では、大地震や疫病による犠牲者を供養するための造立であったとの説が述べられています。

### ●どこで<造立地>「筥根山之勝地湛精進池之靈泉是當六道之[途]」【上記銘文中 F】

元箱根石仏・石塔群が造立された地が「勝地」すなわち「優れた場所。宗教的に聖なる場所の意味で用いられることが多く、墓所としても選ばれる場所であること【参考文献 36】」、池が当時すでに「精進池」と呼ばれていること、精進池が「靈泉」であり「六道の途（道）【死後に輪廻転生する 6 種の世界への出入り口】」に当たるとされていたことがわかります。（精進ヶ池や六道については後述）

### ●参考<安山岩（石仏・石塔の材料）>

中世においては関西から西日本にかけて残る石造物が花崗岩（通称「御影石」）製であるのと対照的に関東地方の石造物は安山岩製（本小松石、新小松石、根府川石など）が多いとされます。

この安山岩（輝石安山岩）は箱根火山の噴出溶岩が固結したもので、特有の緻密な石質です。平安時代以前の石造物に多用された凝灰岩は比較的軟質でしたが、鎌倉時代以降の石造物に用いられた花崗岩・安山岩は硬質な石材であり、耐久性、耐火性に優れています。【参考文献 38】

小松石は、かつては伊豆石、相州石とも呼ばれました。小田原城や江戸城の改修工事等にも大量の石材が用いられました。中でも真鶴でしか採取できないものが「本小松石」と呼ばれ高級墓石として流通しています。

精進ヶ池のある二子山の南方にある文庫山の麓には採石場があったとされ、現在も山麓に岩が露出した状態を見ることができます。ここで採取できるのは「デイサイト」という岩石です。

## 3. 歴史を照らす文字記録2

### 「文献資料」－旅行記等に見る往時の箱根山中－

元箱根の精進ヶ池畔で石造物の造立が始まる十数年前に箱根路（湯坂道）を超えた人々が残した日記や旅行記に、当時の箱根山中の状況を伝える記述が残されています。

時代を下った江戸時代には、外国人医師の詳細な旅行記、さらには温泉案内記や郷土誌に図解を交えた紹介が行われ、200 年前の状況をビジュアルに知ることができます。

文献①: 1280 年（弘安 3 年）頃

#### 『春のみやまち』

作者：飛鳥井雅有（あすかい まさあり 1241 生～1301 没 鎌倉時代の公卿、歌人。天皇に仕える廷臣として京都と鎌倉を往来。男性の手になる早い時期の仮名で書かれた日記紀行文学を残す。）

飛鳥井雅有による仮名日記『春のみやまち』には、子や孫を早くになくした彼の歌道と古典研究にかける心情や蹴鞠の家系安泰を喜ぶ心情などが吐露されています。

その中に箱根路（湯坂道）を使って鎌倉へ向かった折の箱根山中の様子が記述されており、元箱根石仏・石塔群が造立される 10 年ほど前の時期、この場所に「地獄」があり、亡者がさまよう地とされていたことがわかります。

「この山には地獄とかやもありて、死人常に人に行き会ひて、故郷へ言伝てなどする由、あまた記せり。いかなることにかと不思議なり。」

■ 釈文：新編日本古典文学全集 48 中世日記紀行集、小学館、1994、県立図書館 918CC102 48 より

■ 参考写真 23：『春のみやまち』の版面（飛鳥井雅有『春のみやまち』注釈、浜口博章、桜楓社、1993、  
□ 県立図書館 915.4BB106 より転載）

文献②：1659 年（万治 2 年）頃

### 『東海道名所記』

作者：浅井了意（1612 生?～1691 没 江戸前期の仮名草子作者。明暦の江戸大火をルポルタージュした『むさしあぶみ』（1661）、現実批判を笑いのなかで行おうとした『浮世物語』（1665 頃）、中国の怪異小説を翻案し日本の奇談を集めた『御伽婢子（おとぎぼうこ）』（1666）などの秀作を発表。浄土真宗の学僧でもあり仏書の注釈も多い。）

浅井了意作の仮名草子『東海道名所記』は、楽阿弥という諸国遍歴の道心者が、江戸で連れになった若い大坂商人と、狂歌・狂句を吟じながら京都を目指す、その途中の名所・旧跡・風俗などを描いた滑稽（こっけい）紀行文学です。

小田原から箱根を経由して三島へ向かう途上の様子を記述した箇所から、江戸時代初期における芦ノ湖にまつわる伝説、その畔に「さいのかはら（賽の河原）」と呼ばれる場所があり通行者が石を積んで念仏を唱えていたこと、阿弥陀仏と地藏菩薩を祀る堂があったことなどがわかります。

「そのすゑに、ミずうみあり。底にハ神霊ありとて、人おそれつつ。いにしえよりこのかた、水底をミたるものなし。その次に。さいのかはらあり。右の方にて、石をつミ念仏申てとをる也。左のかたに、弥陀地藏の堂あり、不断ねんぶつの所なり。」

■ 釈文：『東海道名所記1 東洋文庫 345』浅井了意著 朝倉治彦校注、平凡社、1979 年、□ 県立図書館 913.51K 51 より

■ 参考写真 24：『東海道名所記』の版面（国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2533857> より転載）

文献③：1690 年（元禄 3 年）頃

### 『日本誌 下巻 日本の歴史と紀行』

作者：ケンペル（1651 生～1716 没 江戸中期 1690～1692 に来日したドイツ人博物学者兼医者。オランダ東インド会社新日本商館長コルネリウス・アウトホールンに従って商館付医師の資格で日本に来朝。滞日中に 2 回江戸参府に随行する。日本での地理、風俗、動植物などの観察記録をもとに『廻国（かいこく）奇観』『日本誌』を著しました。）

『日本誌』は、日本の歴史、地理、動・植物、政治、宗教、長崎と貿易、参府旅行の記録等から成り、ヨーロッパではじめて体系的に日本を紹介した著作。ケンペルの死後、残された草稿の英訳本が最初に出版され（1727 年）、その後、オランダ語、フランス語、そしてオリジナルのドイツ語版が刊行されます。江戸幕府はオランダ語版を所有し、その翻訳は蘭学者や知識人に感化を与えたとされます。

同書の第 11 章「旅の続き、浜松から江戸城に至る（60 里 38 町）」に、吉原（静岡県富士市）から小田原へ向かう途上の箱根の様子が博物学者らしい詳細さで記述されており、芦ノ湖畔で「なまんだ



(南無阿弥陀仏)」と念仏を唱える僧侶の様子、芦ノ湖にまつわる伝説、「賽の河原」での子供の靈魂を慰霊する習俗(紙に記名して湖水に沈める)などを知ることができます。

なお、江戸期の箱根越えが旧道であり湯坂道を経由しなかったためか、精進ヶ池畔の石仏・石塔群に関しては触れられていません。

「関所の門から少し離れた湖畔に、粗末な木の堂祠が 5 棟並んで建てられていた。最初の2つの堂の祭壇の上には老婆の座像〔奪衣婆〕が飾っており、そのいずれにも 1 人の僧侶が座し、鉦を敲いては、なまんだ(Namanda)を唱えていた。」  
「湖水の底に 7 歳以下で死んだ子供が呵責を受けている地獄があり、その子供らは罪が浄められるまで、懺悔し贖罪しなければならない。仏僧の教えに従えば、紙に記した名前と経文が水に浸されると、その子供らの靈魂は浄罪されないまでも苦業を軽減される」  
「死んだ子供の靈魂のいる所は、小石がピラミッド形に塔のように積み上げられている川岸であり、ここは賽の河原(Sai no kawara)と呼ばれていた。」

■ 翻訳文:『日本誌 下巻 日本の歴史と紀行』、エンゲルベルト・ケンペル、今井正 訳、霞ヶ関出版、1989 年、□県立図書館 291.09 502 より

○ 上記とは別の翻訳もあります。→『江戸参府旅行日記 東洋文庫 303』ケンペル、斎藤信訳、平凡社、1977 年、□県立図書館 291.0 9H 290

■ 参考写真 25: ケンペル『日本誌』オランダ語版 1733 年刊の扉ページ(国立国会図書館『江戸時代の日蘭交流』<http://www.ndl.go.jp/nichiran/data/R/207/207-002r.html> より転載)

○ 1733 年刊行オランダ語版の復刻版が県立図書館に収蔵されています。

Kaempfer, Engelbert, "De Beschryving van Japan" 21407077 □県立図書館 Y291.01

文献④: 1811 年(文化 8 年)頃

### 『七湯の枝折』

作者は文窓と弄花の二人。歴史や故事に通じた地元の郷土史家のような存在だったのでしょ

うか。箱根七湯を紹介した案内書・紀行文中の白眉とされる『七湯の枝折』は、全 10 巻よりなる七湯を紹介する絵巻です。各湯治場の歴史、出湯の効験、湯宿の紹介、名所旧跡、産物などにも触れてい

ます。多くの写本が残され、また「箱根七湯温泉図会」(弘化 4 年)という形で刊本としても刊行され、七湯の紹介に大きな役割を果たしたとされます。箱根町指定重要文化財<絵画>です。本書中の「二十五菩薩」の解説文には、磨崖仏の銘にある「永仁」年間に、鎌倉・小田原近辺で大きな地震が発生し多くの死傷者が出たため、地元の人々がその供養のために造立したとの見解が述べられています。

[二十五菩薩岩ノ図]「永仁の頃ハ後深草の院の御宇にて、執権北条貞時なり、此年鎌倉小田原辺大に地ふるふて、人多く壓二うたれ死す、依之併せ考れハ右の三郎二郎壱兵藤四郎なども同しく震のために死せしを、里民哀れミて此地にうつミ、此の地蔵を供養せしものとおもハる」  
[満仲墓ノ図]「右正安二年ハ関東疫病流行して人多く死し頃なり、武石四郎左衛門等一類皆此難にかかりて死せしを此所にはうむりしものなるべし」

■ 参考写真 26 曾我兄弟ノ墳、27: 弘法作二十五菩薩岩ノ図、28: 元賽の河原全図(■資料 06:『企画展図録 七湯の枝折』箱根町郷土資料館 編、2004 年、■県立図書館 k06.85 20 2004-9、■公文書館所蔵図書 K25-8.51-0001 より転載)

■ 釈文: 資料 06「つたや本 七湯の枝折 解説文」p.55~56 より

文献⑤: 1841 年(天保 12 年)頃

### 『新編相模国風土記稿』

昌平覺地理局総裁林述齋編。幕府官撰の地誌として相模国研究にとって重要な史料。相模国の総国図説から建置沿革，山川，名所，産物，芸文と各郡村里に分かれています。文書や記録も収録され，村の地勢，領主，小名，寺社，山川や物産等の記述は詳細で正確とされます。風景・社寺・古器物等の絵が挿入されています。

将軍に献呈された浄書本は明治6年の皇居火災で焼失。書写された完全本が内閣文庫（国立公文書館）に所蔵されています。活字翻刻本が明治17年から刊行されました。以後の翻刻版はこの明治本に基づいています。

本書「卷之二十九 村里部 足柄下郡卷之八」中に、当時は芦ノ湖畔にあった「賽の河原」に対して、精進ヶ池畔が「元賽の河原」であり、そこに造立された石仏や石塔群の由来、銘文、外観が図解入りで記述されています。さらに姥子地区にも賽の河原と呼ばれた地があったこともわかります。

■参考写真 29:『新編相模国風土記稿』の版面(■資料 07:『新編相模国風土記稿 第2巻 大日本地誌大系 20』、蘆田伊人校訂、雄山閣、1972年、口県立図書館 K291 ①D 2、■公文書館所蔵図書 K291-0-0007)より転載) 翻刻版は各種あり

## 4. 地蔵信仰 —地獄で仏、地獄の地蔵—

### 4.1 地蔵菩薩

精進ヶ池畔に造立された仏像の大半を占める「地蔵菩薩」とは仏教の教義によれば、釈迦入滅後、弥勒が下りきて衆生を救うまでの無仏の56億7千万年の間、衆生の救済を行う菩薩であり、人間が死後に輪廻転生する六道（地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天道）で迷える衆生を教化する「六道能化」であるとされます。【参考文献 64】

六地蔵（寺院や墓地の入口に立つ6体の地蔵菩薩像）とは、地蔵が六道の6つの世界すべてにおいて衆生を救うことを示す日本の仏教信仰です。

そもそも「地獄」とは、因果応報や輪廻転生といった思想とともに仏教が日本にもたらした概念です【参考文献 33】。その恐るべき有り様は、平安中期に書かれた『往生要集』や『地獄草紙』『餓鬼草紙』などの視覚化された画像によって多くの人々の中に具体的なイメージとして定着していきます。

平安時代中期以降、末法思想が広がる中、死後に地獄へ墮ちることが必定であり信仰と実践によって極楽浄土への往生を得たいとする人々の願いを受け止めるべく様々な宗教的言説や勢力が台頭します。極楽浄土の教主である阿弥陀や地獄の救済者である地蔵菩薩はそのような環境の中で人々の信仰を集めていきます。そこで地蔵菩薩に求められたものは、死後の「地獄抜苦」や「代受苦」のみならず、現世での様々な利益でもありました。経文の書写・奉納や地蔵像の造立などの信仰実践によって、亡き人や自身の罪を滅して、苦を逃れ、利益を得ようとしたのです。

また、中国で成立した十王信仰（死後の世界で人は生前の罪業を審判され責め苦を負う）が日本でも流行し、十王の一人である閻魔王の本地仏が地蔵菩薩であるとの説も一般化していきます。『今昔物語集』（平安後期）や『沙石集』（鎌倉中期）などの仏教説話集に取り上げられた地蔵菩薩譚には死んだ人を蘇生させ・延命させる地蔵の話が多いことが特徴とされます。

■参考写真 31:「地獄の釜から衆生を救い上げる地蔵菩薩」

(矢田地蔵縁起絵巻 <http://blogs.yahoo.co.jp/yunitake2000/48121374.html> より転載)



■参考写真 30:「六地蔵」(観音寺)川崎市多摩区生田にて撮影)



さらに、日本の土着的な童子神信仰や賽ノ神信仰などとも習合していくことで、子供の守護者としての地蔵、道祖神と団体ともされる地蔵へと変容し、日本人の中に広く深く浸透していきました。元箱根の地蔵磨崖仏が、冥界から亡者がこの世に舞い戻ることを防御する「賽（境）ノ神」としての地蔵菩薩の効験を期待したものとも考えられます。

## 4.2 賽の河原

上述のとおり各種の文献史料で、石仏・石塔群が造立された精進ヶ池畔や芦ノ湖畔が「賽の河原」と呼ばれていたことがわかります。

「賽の河原」とは死んだ子供が亡者として赴く場所（冥界）です。その構成要素は①河原、②子供の亡者、③鬼、④地蔵、⑤石積み（石塔）の5点で、幼児死亡率の高かった時代の子ども観や幼児葬法のあり方を背景にした冥界観が、地獄の救済者であり子供の守護者ともされた地蔵菩薩信仰と結びついたものとも考えられます。【参考文献 64】

文献上では「賽の河原」は、室町時代以降に流布したおとぎ草紙『富士の人穴草子』等に登場しますが、現代の我々が「賽の河原」について抱くイメージは、空也上人の作と伝承される「西院河原地蔵和讃」に書かれた内容に近いものです。

賽の河原信仰の民間への普及は、おとぎ草紙等の紙メディアや、地蔵和讃やその絵解きを唱導して回る民衆宗教家の活動があったと考えられています。

賽の河原が仏教の経典（法華経方便品）に基づくと主張したのは江戸時代の戯作者・山東京伝でした。京伝作の読本『本朝酔菩提全伝』では、<賽の河原地蔵和讃>の一種が「門説経の修行者」によって「佐比の河原の説教節」として調子を取りながら語られます。その挿絵（賽之河原図）は賽の河原の典型的なイメージを伝えています。【参考文献 64】

■参考写真 32:「賽之河原図」(山東京伝『本朝酔菩提全伝』善悪因果序品、1809 年刊(早稲田大学・古典籍総合データベース [http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he13/he13\\_03047/index.html](http://www.wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/he13/he13_03047/index.html) より転載)

古来、あの世への入口である墓地や葬地は河原の近辺に設けられることがありました。賽の河原は、この世とあの世（冥界）の境界付近に位置し、石ころだらけの場所が賽の河原に擬せられて、地蔵菩薩像さんが祀られていることも多いようです。

元箱根に限らず、全国の霊山・霊場や、村境・峠・河原・湖畔・海岸などの境界的場所には、賽の河原と呼ばれる場所が少なくないのです。

民俗学者の柳田国男は「賽の河原は道祖信仰から出た。サエノカミ（道祖神 境を護る神）＝サイノカワラ。石を積み重ねるという行為は最初は神様の防御行為の手伝いの意味だった。地蔵は道祖神の本地、道祖は地蔵の垂迹であった」などと述べています。【柳田国男「神を助けた話 十四 道祖と地蔵」ちくま文庫版『柳田国男全集 7』p.454～455、筑摩書房、1990 年より略記】

芦ノ湖畔の旧東海道沿道に江戸時代初期から明治初頭まで、地蔵堂や石仏・石塔が林立する「賽の河原」と呼ばれる一角があったことが、複数の文献史料からわかります。旧東海道を往来する、江戸時代の旅行者たちの目に留まることとなり彼らが記録した旅行記等によって当時流布されていた伝説や当時の風景を垣間見ることができます。

ごく僅かな面積に縮小されたものの今も残る「賽の河原」は、江戸幕府が湯坂道を廃して旧・東海



■参考写真 33:「賽の河原の移転」  
(地理院地図 <http://maps.gsi.go.jp/> の一部に加工)

道を公道とした頃に、精進ヶ池畔から芦ノ湖畔に移転したようです。

なお、この移転に伴い精進ヶ池畔は「元賽の河原」と呼ばれたことが『新編相模国風土記稿』に記述されています。

江戸後期になると浮世絵や、幕末期に来日したイギリス人ベアトによる写真にも残され、往来する人々の地藏菩薩への信仰の高まりを知ることができます。

■参考写真 34: 五雲亭(歌川)貞秀『東海道箱根山中圖』文久 3(1863)年、○県立図書館 K72.85/15 (50421247) ○神奈川県立図書館デジタルアーカイブ(下記 URL 参照)で画像を閲覧できます。

[http://www.klnet.pref.kanagawa.jp/digital\\_archives/tokaido/tokaido\\_gazo\\_page/9.hakone/gazo\\_hako8.htm](http://www.klnet.pref.kanagawa.jp/digital_archives/tokaido/tokaido_gazo_page/9.hakone/gazo_hako8.htm)

■参考写真 35:「地藏様の銅像(芦ノ湖)」(■資料08:『F. ベアト幕末日本写真集』横浜開港資料館、1987年、■公文書館所蔵図書 G27-0-0154 より転載)

■参考写真 36: 現在の芦ノ湖畔「賽の河原」(<http://kouun.jugem.jp/?eid=3139> より転載)

○参考資料:「町指定史跡 賽之河原 元箱根興福院」『箱根の文化財 第13号 特集 興福院』箱根町教育委員会、1975年、p.55~56

○参考資料:澤田秀三郎「町指定史跡『賽の河原』について」『箱根の文化財 第10号 一指定文化財特集号一』箱根町教育委員会、1978年、p.22~61

## 5. 湯坂道 — 箱根路の古道 —

元箱根石仏群は、箱根路(湯坂道)のルート上で最も標高の高い地点、上二子山の麓、芦之湯近傍にあります。

箱根は西と東を往還するために越えなければならない要衝として、古来いくつかのルートが開拓され利用されてきました。

- ① 碓氷道(上古道) 箱根を越す最古の道。乙女峠と明神ヶ岳の2か所で外輪山を越える。碓氷峠には、日本武尊東征の折の「吾妻はやの碑」が立つ。
- ② 足柄道(中古道—平安時代) 御殿場経由で箱根外輪山の北側鞍部を迂回する道。高度も低く通行しやすかったためか、その後も副道として使われた。現在の東名高速道路も外輪山の北外側を迂回している。※
- ③ 湯坂道(近古道—鎌倉時代~) 延暦21年(802)の富士山噴火で足柄道が塞がれたため開かれた道。数年後に足柄道が復旧したが、鎌倉時代以降は旧道ができるまで公道であった。※
- ④ 旧道(近世道—江戸時代~) 元和年間に江戸幕府が新設した官道。「箱根八里」と呼ばれ、明け六つ(午前6時)に小田原を発って、暮れ六つ(午後6時)に三島に着いたという。箱根を通過する経路としては短距離であり。1962年に



■参考写真 37: 湯坂道の標高グラフ(「県西地域ウォーキングガイド「湯坂道」より転載)

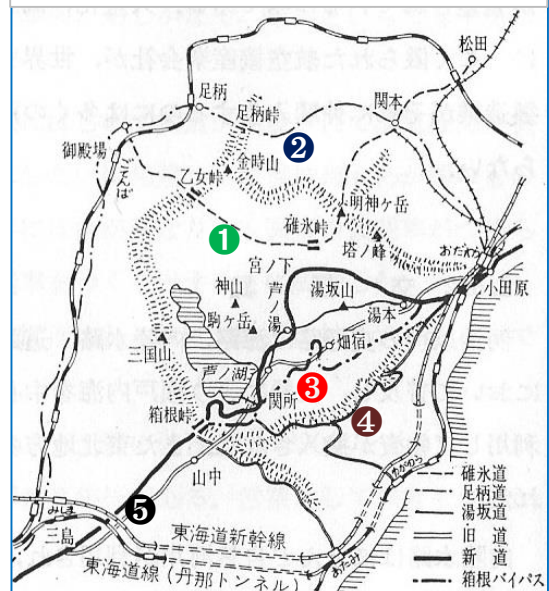


図-2.8 箱根路の移変り (文献2)より)

■参考写真 38: 箱根路の移変り(八十島義之助・花岡利幸共著『交通計画(講義と演習)』技報堂、1979年、p.24 図2.8、○県立図書館 681B 18 より転載)



開通した箱根新道（国道1号線をバイパスする自動車専用道路）は、この旧道に沿ったルートをとっています。※

- ⑤ **新道**（第一号国道—大正時代～）かつて温泉道として入湯客が往来した温泉場を結び、湯本から芦ノ湖に至るルートをとります。自動車の利用に耐えるように緩勾配を選んでいきます。

※印の3つのルートは『かながわの古道50選』に選ばれています。

■参考写真 39:「湯坂道と旧東海道のルート」(地理院地図 <http://maps.gsi.go.jp/>の一部に加工)

■参考写真 40:『かながわの古道50選』の表紙画像(■資料 09:神奈川県土木部道路管理課 編『かながわの古道50選』神奈川県、1995年、■公文書館所蔵図書 K514-0-0012より)

○インターネット上で公開されている「県西地域ウォーキングガイド」(URL 下記)にはエリア別の走行ルートや見どころがわかりやすく解説されたパンフレットが用意されています。

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f530073/p885902.html>

弘安2年(1279)、藤原定家の嫡男・為家の側室・阿仏尼は、京都から鎌倉への途上、この湯坂道を越える様子を『十六夜日記』に書き残しています。

箱根権現(神社)への参詣路でもあった湯坂道は、頼朝や実朝など鎌倉幕府の将軍の伊豆・箱根二所詣にも使われたとされます。【参考文献13、p.21,29-30】

湯坂道の道中で最も標高の高い位置にある精進ヶ地畔の一带は、箱根火山の溶岩が至る所で露出し、また箱根山を南から北に吹き抜ける強風、多湿と温度差によって多発する濃霧、といった自然環境からも荒涼とした地であり【参考文献:資料01】、それは当時の人々に流布していた「地獄」を彷彿とさせる情景であったことでしょう。

かつては葬送の地であったともされる精進ヶ地畔は、この世とあの世の境界に当たる「六道の道」「霊泉」を擁する「管根山之勝地」として「霊場」を形成していたと考えられます。

(江戸時代1800年頃の『東海道分間延絵図』には精進ヶ池は「生死ノ池」と記され、その近傍には「死出山」も見えます。)

■資料 10:『東海道分間延絵図 箱根 箱根権現』児玉幸多解説、東京美術、1992年、■公文書館所蔵図書 K292-0-0015

なお、箱根山は修験者たちの修行の場としても古来、峰入りと呼ばれる山岳修行は箱根権現の開祖・満願上人の墓(奥津城)を起点に駒ヶ岳に至る途上に精進ヶ地に立ち寄るルートがあったとされ、山岳信仰の面からも霊場とされた形跡があります。【参考文献45、p.95】

また、石仏・石塔群が造立された時期は、「文永・弘安の役(モンゴル帝国の侵攻)」に当たり戦勝祈願所として箱根権現が名を上げ威光を高めた時期に当たるため、造立に箱根権現が何らかの形で関与したことも考えられます。【参考文献45、p.325~332】

箱根権現は安貞2年(1228)の焼失に続き、永仁3年(1295)11月にまたも焼亡します(『鎌倉年代記裏書』)が、翌年には梵鐘が铸造され、普賢菩薩像の造立などが別当・尊實の下で復興が進みます。元箱根の石仏・石塔群の造立が箱根権現の復興の時期と重なるため、鎌倉幕府を後ろ盾とした尊實と忍性が協力して、箱根権現の復興に連動した石仏・石塔群造立による箱根の霊山化を推し進めたとする説もあるのです。【参考文献58】

## 6. 俗称 — 伝承に込められた人々の思い —

元箱根の石仏・石塔群の各々には俗称が付けられ、その俗称で呼び慣らされてきました。

これらは事実ではないにせよ、造立に関与した宗教的な人物や組織と全く無関係ではなさそうです。700年の時の経過の中で、この地域で流布された伝聞の一端や遺跡に接する人々の願望も見え隠れしているのかもしれませんが。

### 6.1 二十五菩薩（上記 1.1.1 位置図②）

「二十五菩薩」とは浄土教で臨終の際に、阿弥陀仏とともに来迎（らいごう）する二十五の菩薩を言います。観世音・大勢至・薬王・薬上・普賢・法自在王・師子吼・陀羅尼・虚空蔵・宝蔵・徳蔵・金蔵・金剛蔵・山海慧・光明王・華嚴王・衆宝王・月光王・日照王・三昧王・定自在王・大自在王・白象王・大威徳王・無辺身の二十五菩薩とされ、地藏菩薩は基本的には含まれていません。

元箱根の磨崖仏の、斜面に突き出た岩に多面的に彫刻された1体の阿弥陀仏と多くの地藏菩薩群のあり様が「阿弥陀来迎図」を連想させたのでしょうか。

■参考写真 41:「阿弥陀二十五菩薩来迎図(早来迎)」絹本着色 鎌倉時代 京都・知恩院

(■資料 11:『鎌倉大仏と阿弥陀信仰』神奈川県立金沢文庫、2002年、■公文書館所蔵図書 K18-4-173 より転載)

なお、この磨崖仏群は「弘法大師作」との伝承があります。それに関しては『新編相模国風土記稿』中ですでに疑義が出されていますが、空海という真言密教の祖を持ちだしてくる要因として、造立に真言系の箱根修験者たちの関与があったことも想像されます。

### 6.2 曾我兄弟、虎御前の墓（上記 1.2.1 位置図①）

源頼朝が挙行する富士の巻き狩りの場で親の仇打ちを果たした曾我兄弟（曾我十郎・五郎）の行状は『曾我物語』として脚色され、一般に流布しました。

虎(御前)は平塚生まれの大磯宿の遊女で十郎の妾です。十郎の死後、箱根権現の別当・行實に依頼して法要を行って出家し地藏菩薩の逆縁利生の方々にすがって信仰を深めたとされています。

(ちなみに、この行實が、石橋山の合戦で敗走中の源頼朝を救援したことが機縁で、箱根権現は鎌倉幕府の直轄寺社となり、將軍による二所参詣が恒例行事となり隆盛の時代を迎えます。)

箱根権現（箱根神社）は下記のように『曾我物語』の舞台として登場し、因縁浅からぬものがあります。【参考文献 45】

- ・弟の五郎は、母の勧めにより箱根権現の稚児となったが、仏道に入れば仇討ちができなくなるとして脱走する。
- ・仇討ち決行の途上、箱根権現に立ち寄り戦勝祈願する曾我兄弟に、別当・行實は源家の宝刀を引き出物として贈った。



人口に膾炙した曾我物語の主人公たちと箱根との因縁、親近感から、墓塔である五輪塔に彼らの名が冠されたのでしょうか。

■参考写真 42:「曾我兄弟夜討之図」一寿斎(歌川)芳員画(■資料 12:横浜市都筑区池辺町 原久三氏所蔵文書・資料 浮世絵版画「曾我兄弟夜討之図」■公文書館寄託資料 ID:2200871175 より)

### 6.3 多田満仲の墓（上記 1.2.2.1 位置図③）

多田満仲こと源満仲（みなもとのみつなか）は清和源氏の代表的存在で平将門の乱の平定に努力し源姓を与えられた経基王の子・満仲（?～997没）です。摂津国多田地方（現在の兵庫県川西市）



に開発領主として土着し多田庄を経営したことから多田満仲と呼ばれ、これを継いだ子・源頼光の系統は摂津源氏と呼ばれます。大江山の鬼退治で有名な頼光の家来の四天王の一人が坂田金時です。

多田満仲の墓と俗称される元箱根の宝篋印塔の供養導師として銘に刻まれる忍性(良観上人)は、建治4年(1275)に多田庄の別当に任じられ、その修造や維持といった荘園経営に力を尽くしたことが『多田院文書』によって知られます。忍性を介した、この接点が命名の理由なのでしょうか。

『今昔物語』をはじめとして幸若舞、能、御伽草紙にも満仲にまつわる逸話が残されており、元箱根をはじめ各地に残る伝説は回国の聖(ひじり)や説経の徒が伝えたものとも言われています。【参考文献 01】

#### 6.4 応長地蔵または「火焚き地蔵」(上記 1.1.3 位置図⑥)

応長地蔵は、造像銘記として刻まれた造年紀である「應長元年」にちなむ俗称です。

また「この地域には、身内の不幸に際し、この応長地蔵の前で送り火を焚き、精進池畔で花や線香をあげ、霊を山へ送る「浜降り」と称する習慣がありました。そこからこの仏像は「火焚地蔵」とも呼ばれています。」【箱根町によって設置されたパネルの解説文より】

#### 6.5 八百比丘尼(上記 1.2.2.2 位置図⑤)

八百比丘尼とは、山中で得た人魚の肉を食べて不老不死の身となった女が、出家して比丘尼となり諸国を放浪し、最後は若狭にたどり着き、800歳で入定するという伝説です。

修験者の比丘尼が箱根宿の駒形権現社近傍に住んでいたとの記述が『新編相模国風土記稿』に見えます。地獄極楽の絵解きをしながら、熊野三所権現勧進のため諸国を歩いた「熊野比丘尼」と呼ばれる尼僧たちの存在が「八百比丘尼」に転じたのかもしれませんが。

#### 6.6 六道地蔵(上記 1.1.2 位置図④)

「六道」とは前述のように死後に輪廻転生する6種類の世界を言います。「六道の途(道)」すなわち死後の世界との出入りに立って、地獄の救済者となったり、他界からの災厄を防いだりする地蔵菩薩像という意味で「六道地蔵」と呼ばれるのでしょうか。

ちなみにこの磨崖仏は、西から関東を目指して湯坂道を登ってくる人々と丁度対面する位置に彫られています。地蔵が道祖神(塞の神)と同体とみなす民俗学の考察が思い出されます。

なお元来、六道地蔵の脇に刻まれた銘文には「六地蔵」の名称が使われていましたが、前庭に残る石造物の銘文から、江戸時代には「六道地蔵」の呼称が定着していたことがわかります。

※参考写真のキャプション中、出典が明記されていない写真は公文書館スタッフが撮影したものです。

### 元箱根石仏・石塔群に関する総括的な調査報告書

→ ■資料 01: 箱根町教育委員会『元箱根石仏・石塔群の調査』(箱根町文化財研究紀要第25号)、1993年、  
 〇県立図書館 K06.85 4 25、■公文書館所蔵図書 K06-8.51-0001

昭和63年(1988)から平成4年(1992)にかけて箱根町教育委員会(東海大学との合同)により実施された調査の報告書です。

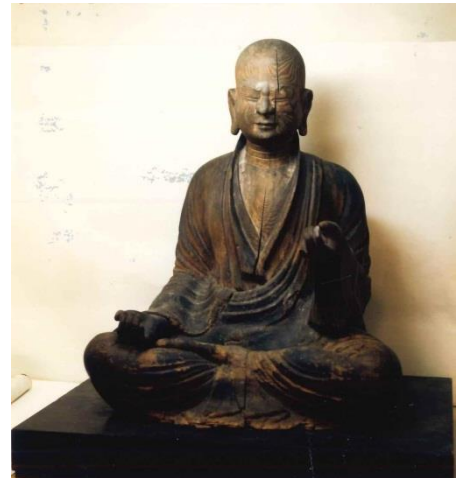
→ ■資料 02: 文化財保存計画協会編集『元箱根石仏・石塔群保存整備事業報告書 一よみがえる地蔵信仰の霊地一』、箱根町教育委員会、1999年、公文書館スタッフ所蔵

平成2年(1990)から平成10年(1998)にかけて箱根町によって実施された(工事は平成4～9年)保存整備事業の報告書です。

## 7. 箱根権現

神奈川県足柄下郡箱根町元箱根に所在する神社。祭神は、  
瓊瓊杵尊ににぎのみこと、木花咲哉姫尊このはなさくやひめのみこと、彦火火出見尊ひこほほでみのみことです。

箱根山は古代から山岳信仰の一大霊場でした。その霊場に鎮座する箱根三所権現は、平安時代初期に山岳修行僧万巻(満願)によって勧請・建立されたと伝えられます。



■参考写真 43:資料 13 箱根神社蔵万巻上人像  
神奈川県広報課撮影写真コレクション 4199406513

### 7.1 箱根権現を詣でる人々

鎌倉時代、箱根権現は源頼朝をはじめ歴代将軍や幕府要人の崇敬をうけました。源頼朝により創始された鎌倉幕府の重要な儀礼である「二所詣」は、その代表例といえます。「二所詣」とは、箱根権現と伊豆山権現の二社を参詣することで、寿永元年(1182)、北条政子の安産祈祷の奉幣使の派遣以降しばしば行われました。このように箱根権現は、幕府から特別な待遇をうけ発展しました。

鎌倉時代以降も関東公方足利持氏や、北条早雲・氏綱などの関東を支配した武家から厚い保護を加えられ栄えます。天正18年(1590)、豊臣秀吉による小田原攻めで箱根権現は灰塵に帰しますが、文禄3年(1594)には徳川家康から200石の寺領を与えられ再建されます。以後、江戸幕府の庇護をうけることとなりました。

江戸時代、東海道を官道として整備されると、箱根の地は東西交通の要衝となりました。また、時代が下るにつれ箱根へ湯治に訪れる人々が増加します。これにより箱根には多くの人々が訪れ、箱根権現もさらなる賑わいをみせることとなります。

### 7.2 箱根神社へと改称

明治の世に移り、新政府は神道国教化政策の一環として神仏分離政策を推進し、神社の中から仏教的色彩が排除されました。この政府の施策により箱根権現は大きな転換期を迎えます。別当寺金剛王院東福寺は廃寺となり、権現の神号は廃止されました。この時から箱根権現は箱根神社と改称しました。

#### 【箱根権現 展示品一覧】

No.	資料名	年代	西暦	展示状態	所蔵者・出典等
13	万巻上人像	—	—	複製物	広報課撮影写真コレクション 4199406513
14	箱根山縁起	建久2年	1191	複製物	県史写真製本 2200415840
15	箱根浴湯記	文化5年	1808	原資料	相模国足柄上郡文書 2199300004
16	道中記	文政2年	1819	原資料	相模国・武蔵国各郡文書 2200430353
17	宗教法人認証原議綴	昭和28年	1953	原資料	歴史的公文書 1200516543



## <参考文献（元箱根石仏・石塔群）>

- 01：『(平凡社)世界大百科事典（CD-ROM 第2版）』日立システムアンドサービス、1998～2003年
- 02：『新潮世界美術辞典』新潮社、1985年
- 03：新谷尚紀・関沢まゆみ編『民俗小事典 死と葬送』吉川弘文館、2005年
- 04：庚申懇話会編『日本石仏事典 第2版』雄山閣、1980年
- 05：日本石仏協会『続 日本石仏図典』国書刊行会、1995年
- 06：日本石造物辞典編集委員会編『日本石造物辞典』吉川弘文館、2012年
  
- 07：赤星直忠「箱根磨崖仏の調査」神奈川県編『史蹟名勝天然記念物調査報告書 第4輯』1936年
- 08：赤星直忠「精進池畔の石造塔」箱根町誌編纂委員会編『箱根町誌 第1巻』角川書店、1967年
- 09：浅子勝二郎「鎌倉期における石造美術をめぐる若干の問題」『史学』三田史学会、Vol.39 No.4、1967年
- 10：跡部直治「箱根山の磨崖石仏と石造塔婆」『箱根神社大系 下巻』箱根神社社務所、1935年
- 11：石井進「都市鎌倉における「地獄」の風景」御家人制研究会編『御家人制の研究』吉川弘文館、1981年
- 12：今井雅晴「時宗と地藏信仰」和歌森太郎ほか編『日本文化史学への提言』弘文堂、1975年
- 13：岩崎宗純『中世の箱根山（箱根叢書28 かなしんブックス45）』神奈川新聞社、1998年
- 14：大岡實「箱根二子山麓の石塔」『画説』第12号、東京美術研究所、1937年
- 15：大島建彦「賽の河原の地藏」『国文学 解釈と教材の研究』643号、学灯社、1999年
- 16：岡本智子「大蔵派宝篋印塔の研究」『戒律文化』2号、戒律文化研究会、2003年
- 17：岡本智子「石造宝篋印塔の成立と展開」『奈良大学大学院研究年報』10号、2005年
- 18：岡本智子「初期宝篋印塔と律宗」『戒律文化』4号、戒律文化研究会、2006年
- 19：川勝政太郎「中世における石塔造立階級の研究」『大手前女子大学論集』4号、1970年
- 20：川勝政太郎『日本石材工藝史 改訂版』綜芸舎、1971年
- 21：川勝政太郎「講衆に関する研究」『大手前女子大学論集』7号、1973年
- 22：川勝政太郎「大蔵派石大工と関係遺品」『史迹と美術』史迹美術同攷会 63(5)、1993年
- 23：貫達人「極楽寺と忍性について」『金沢文庫研究』10(10・11)、神奈川県立金沢文庫、1964年
- 24：庚申懇話会監修『石仏を歩く JTB キャンプブックス』日本交通公社、1994年
- 25：桜井徳太郎編『地藏信仰 民衆宗教史叢書⑩』雄山閣出版、1983年、
- 26：佐々木健策「西相模における石塔の加工と変遷」『小田原市郷土文化館研究報告』45号、2009
- 27：佐藤亜望「石造物研究の流れ—中世石造物を中心に—」日本石造物辞典編集委員会編『日本石造物辞典』吉川弘文館、2012年
- 28：佐藤亜望「中世石工について」『日本石造物辞典』吉川弘文館、2012年
- 29：佐藤仁彦「中世鎌倉における遺骸の扱われ方」五味文彦編『中世都市鎌倉と死の世界』高志書院、2002年
- 30：佐藤弘夫「霊場—その成立と変貌」東北中世考古学会『中世の聖地・霊場』高志書院、2006年
- 31：澤地弘「箱根の石仏（箱根叢書13 かなしんブックス28）」神奈川新聞社、1989年3月
- 32：清水邦彦「日本地藏信仰史研究概観」『比較民俗研究』13号、1996年
- 33：新谷尚紀「地獄・論—地獄の起源—」『歴博』国立歴史民俗博物館、105号、2001年
- 34：関忠夫「箱根の石造文化—十三～十四世紀を中心として—」箱根町誌編纂委員会編『箱根町誌 第3巻』角川書店、1984年
- 35：千々和到「中世の金石文とその調べ方 —板碑調査の日記から—」『歴史評論』389号、校倉書房、1982年

- 36：千々和到『板碑と石塔の祈り 日本史リブレット 31』山川出版社、2007年
- 37：柘植信行「中世箱根における温泉と地蔵信仰」、日本温泉文化研究会編『湯治の文化誌 論集<温泉学>2』岩田書院、2010年
- 38：中江庸「石材」日本石造物辞典編集委員会編『日本石造物辞典』吉川弘文館、2012年
- 39：中野敬次郎『新編登山地図帳 箱根と伊豆』山と溪谷社、1950年
- 40：中野敬次郎「箱根山の古道と中世以降の箱根の発展」箱根町誌編纂委員会編『箱根町誌 第1巻』角川書店、1967年
- 41：中野幡能「国東・臼杵の磨崖仏と修験道文化」五来重／編著『修験道の美術・芸能・文学 2 山岳宗教史研究叢書 15』名著出版、1981年
- 42：根立研介「元箱根磨崖仏について」『国華』1226号、国華社、1997年
- 43：野澤均「磨崖仏の造像空間について」『考古学論究』13号、立正大学考古学会、2010年
- 44：野澤均「磨崖仏」『季刊考古学』121号、雄山閣、2012年
- 45：箱根神社『箱根神社 信仰の歴史と文化』箱根神社社務所、1990年
- 46：箱根町郷土資料館編集『七湯の枝折 企画展図録』箱根町郷土資料館、2004年
- 47：箱根町立郷土資料館『興福院と賽の河原』1988年
- 48：速水侑『地蔵信仰 はなわ新書 049』塙書房、1975年
- 49：日野一郎「相模箱根の磨崖地蔵群と石造塔」『東京史談』二十の二、東京史談会、1952年
- 50：日野一郎「奈良西大寺系の石大工」『古代探叢 滝口宏先生古稀紀年考古学論集』早稲田大学出版部、1980年
- 51：藤田稔「地蔵信仰の一考察 —鎌倉及び茨城を中心として—」『日本民族学研究』64号、1969
- 52：前田元重「箱根宝篋印塔と大工前大和権守大蔵康氏」『金沢文庫研究紀要』第9号、神奈川県立金沢文庫、1972年
- 53：松尾剛次「石塔の思想史—五輪塔を中心に—」『宗教研究』83(4)、2010年
- 54：松尾剛次「人はなぜ石塔墓をたてるのか—阿弥陀信仰と弥勒信仰—」『宗教研究』85(4)、2012
- 55：真鍋広済「賽の河原と地蔵和讃」坂本要編『地獄の世界』溪水社、1990年
- 56：馬淵和雄「叡尊・忍性教団と考古学 5 東国の大蔵派と忍性」松尾剛次編『持戒の聖者叡尊・忍性／日本の名僧 10』吉川弘文館、2004年
- 57：丸尾彰三郎「箱根山の石仏」箱根町誌編纂委員会編『箱根町誌 第1巻』角川書店、1967年
- 58：森幸夫「鎌倉・室町期の箱根権現別当」二木謙一編『戦国織豊期の社会と儀礼』吉川弘文館、2006
- 59：山川均『石造物が語る中世職能集団 日本史リブレット 29』山川出版社、2006年
- 60：山川均『歴史のなかの石造物—人間・死者・神仏をつなぐ—』吉川弘文館、2015年
- 61：山本寛二郎「石大工心阿について」『史迹と美術』史迹美術同友会 44(9)、1974年
- 62：和島芳男『叡尊・忍性 人物叢書（新装版）』吉川弘文館、1988年
- 63：渡浩一「<賽の河原>の伝承 —『富士の人穴草子』と『賽の河原地蔵和讃』を中心に—」『説話・伝承学』5号、説話・伝承学会、1997年
- 64：渡浩一『お地蔵さんの世界 救いの説話・歴史・民俗 民衆宗教を探る』慶友社、2011年
- 65：『第3回 鎌倉考古学研究所シンポジウム「考古学からみた鎌倉の災害」—発表資料集—』特定非営利活動法人 鎌倉考古学研究所、2013年
- 66：『地獄百景 別冊太陽 NO.62 日本のこころ 62』平凡社、1988年
- 67：プログラム『ふるさと歴史シンポジウム 虎女と曾我兄弟 ～ゆるぎの山なみを越えて 今に伝わる曾我伝説～』ふるさと歴史シンポジウム実行委員会、平塚市、平塚市教育委員会、2004年